



森の目が世界を問う ——アフリカ熱帯雨林の保全と先住民——

市川 光雄 著

京都 京都大学学術出版会 2021年 iii+276 p.

長年にわたって京都大学でアフリカ中央部のヒトと環境に関する研究を牽引してきた著者による、久方ぶりの単著である。自身の来し方を振り返るとともに、グローバルな政策課題に正面から向き合った、読み応えのある一冊になっている。

本書を貫くのは、熱帯林と住民が共存を続けるにはどうすればよいのかという、著者の強い問題意識である。研究論文の寄せ集めではなく、同僚や若手の成果を含め数多くの先行研究を咀嚼して、問題の所在をわかりやすく描き出している。ベテランならではの仕事で、良質の政策研究としても評価できる。

著者はもともと、政策的関心から研究を始めたわけではない。しかし、専門とするムブティ・ピグミーをより深く知りたいと思う気持ちから、彼らが生活するローカルな場をグローバルな現象と結び付けて理解するようになり、いわゆる地球環境問題への関心を深めていく。著者はこれを、人類学から民族誌、そして地域研究への関心の変化だと表現している。こうした問題意識は、世界銀行の要請を受けてプロジェクトの査閲活動に参加した経験によっていっそう強化された。この顛末を描いた第2章はとても面白く、貴重な記録であるとともに、世銀がそれなりに懐の広い機関であることがわかる。

アフリカ中央部の熱帯林地域で、人々は従来持続可能な水準で森林を利用してきた。人間活動が環境にむしろ肯定的なインパクトを与えてきたことも実証されている。しかし、森林の産品がグローバル市場と結びつき、そこに向けて出荷されるようになったことで、資源の持続性は危機に瀕している。これに対して、森林や野生動物を国立公園のような形で囲い込んで保護するだけでは問題の解決にならない。そこに居住する人々の暮らしを守り、向上させる取組みが決定的に重要だという著者の主張には、強い説得力がある。

アフリカ熱帯林と住民との共存という問題は複雑で、効果的な解決策が本書に提示されているわけではない。しかし、問題が起こっている場を熟知した専門家の手による本書は、問題の見取り図を説得的に提示することによって、それに対して関心を持ち、取り組むことを私たちに促す。これこそが地域研究の仕事であり、その強みが存分に発揮された成果だと思う。

武内 進一（たけうち・しんいち／アジア経済研究所・東京外国語大学）

